

『教育研究』1955年5月（初等教育研究会/不味堂）

# つくる世界に住むセンス

## —小学校の生産教育—



矢 口 新

現代の小学校は生産人を育てるようにつくられていない。それは学校が過去の社会のものであるということである。小学校の教育は永い伝統をもっていて、遠くさかのぼれば、江戸時代の寺子屋にその源を発している。明治になってから、小学校としてその形を整えて来たが、その間を通じて根底に流れているものは、よみ、かき、そろばんの教育という考え方である。今時小学校についてそんなことを考えている人は少いといわれるかも知れないが、根本的には大してちがわない。成程観念的には進んだ思想が存在しているが、現実の小学校の教育は、そうは進んでいない。早い話が学力という問題一つをとってみても、それが問題になるのは、漢字の読み書き、算数の計算（つまりそろばん）なのである。新聞紙上で問題にしていることは皆それである。父兄もそういうことが一番関心がありまたわかるのである。これは社会全体が、そういうレベルであるということである。その中に小学校は生きているのであって、そのレベルでしか教育は行えないということである。だから生産する人間をつくるための施設や方法ということ、たとえ小学校の先生方が考えても、そういうことはなかなか実現し

ない。予算が出ないということもその一つであらわれである。併し予算ばかりでない、小学校教育の全体の基調がそういう生産人の教育とは異なるのである。教育の内容にしても、方法にしても、すべてが、生産人を目ざす教育とはちがったものである。それは恐ろしい程伝統的なものの中に生きている。

小学校が永い間存在して来た社会は、商人の世界ともいべき社会である。市民社会といってもよい。それは江戸の言葉でいえば町人である。外国語でいえば、ブルジョアジーである。ブルジョアジーというのも城下に住む人という意味である。そういう人が社会の中心にすわって、そういう人が必要とする教育がつくり出された。それが小学校のはじめである。人間はかくあるべきもので、こういう教育をしなければならぬと考えて、小学校が設けられたが、その時に具体的に頭に描かれたこういう人間、こういう教養というのは、具体的には封建社会からぬけ出して、新しい市民社会をつくり出した町人であり、その人のもっている教養であった。その頃は決して現代のように、いわゆる産業社会というような社会ではなかった。産業が社会の基底になり、それが社会の動向をきめ、人間の生活が

それに動かされるようになったのは、その後の社会の発達変化によるものである。日本でいえば、明治以後の約一世紀になんなんとする間の発展なのである。

ところで、社会の発展はその間急激に行われたが、教育はその間にどうであったか。もとより教育もまた、すばらしい発展をとげている。特に小学校の教育は、世界一を誇る程充実したものとなっている。ただここで注意しなければならぬのは、その基調にあるものは、現代産業社会の人をつくるというよりは、むしろ封建社会からぬけ出して市民社会が出来た時の、その雰囲気における人間的教養が、具体的人間像として描かれていたということである。これは決して誤っていると断言していいわけではない。当然そうあるべきであるが、今から見れば、これ迄の教育はそういう基調で行われて来たということである。そういう基調の上で、内容や方法を整備し、施設も充実して来たのである。そうして、そこに現代の小学校の如き伝統をつくりあげた。これは単に人間の考え方などというものでなく、血肉となっている伝統である。学校における生徒の行動の仕方、教師の指導も、そういうものに対する父兄の期待もすべて、そういう伝統なのである。肉体となっている伝統なのである。或は習慣、習性といってもよいかも知れない。

こうして社会の発展と教育の発達とが、それぞれ今の段階に到達したとき、これを照合させると、ここにずれが見えて来たのである。これが最近いわれている、産業教育とか生産教育という主張の根源なのである。教育界では、今はまだ産業や生産がそれ程大きなものとして見られていないが、それが既に、教育の過去の伝統によって、その中でのものを見ているということの結果なのである。頭で考えられても、肉体的に感じないのである。併しこれから教育が育てる人間は、単に教養をもっている人間ではなく、ものをつくる、特に産業という形で

ものをつくることの出来る人間でなければならぬのである。そうしてその教育の形は、相当大巾に今の教育とは異らなければならぬ。ところが、そういわれても、教育者にはそれがピンと来ない。今の教育をやって行けばそれが産業界で働くに役立つのではないかというように考える。教育者ばかりでない、一般人においても同様である。それは、根本的なのがいである。考え方、行動の仕方のちがいに基くものがあるのである。それは何であろうか。それは誰にもわからない。ただ見当が付きはじめて来たというのが今の段階である。

今の小学校は、産業という形でものをつくる世界に住む人間を育てようとしているのでなく、どちらかといえば、ものを見る人間を育てようとしているのである。物をつくるということは、最も実践的な世界であって、見ることは根本的に異なるのである。つくる世界に生活するのと、ただ見ているというのでは、人のあり方が全然異なるのである。その例を一つあげよう。映画をつくるという場合を考えてみる。われわれは言葉で「人々が熱心に働いている」と一口にいうが、こういう場面を映画にとって実際に人に見せようとすると、大変な苦勞がするのである。「熱心」などというのは、どういう所にあらわれているのか、ただ仕事をしている所というのならいくらでも画面にあらわすが、熱心に働いているということになるとどういう所なのか、具体的に、その場面を映画にとろうとすると、中々むつかしいのである。更に「人々が」というこの言葉を映画に具体的に表現しようとするともたむつかしいのである。一人ではだめだが二人でよいのか、大勢をうつすのか、大勢をうつすと「人々」ということは表現出来るかも知れないが、今度は「熱心に」ということがどうして表現出来るか、こう考えて来るとなかなかむつかしいのである。こうしてどういうカッ

トをいくつとつて、どう組合せると、どうなるということが計算されてつくられて行くのである。

このように物をつくるということは、具体的なものであって、その点からいうと、言葉は如何に無責任なものかということがわかるであろう。そして言葉というのは、つくる立場のものでなく、見てそれを符号で言い表しているという段階のものなのである。

この映画をつくる話を例として出したのは、つくるということが、具体的な計算にもとづいているということの例として出したのであるが、もう一つ、つくることと見ることとの関係を考えたいと思っただからである。というのは、ただ見るだけに見ているのと、つくると見ているのでは、「見る」ということは言葉では同じであるが、内実は全く異っているということである。いわば、ただ見るために見るのは、無責任なのであって「人々が熱心に働いていますね」と一口に言ってしまう程度の見方なのであるが、つくるために見るのは、それでは見たことにならないということである。計算して、要素に分析し、その組合せでこうなるとして見たときはじめて「つくることが出来るように見た」ことになるのである。

こう考えて来ると、一口につくる世界に生活する人間というが、それは、見ること一つについても、まるでちがった見方をしているということが明らかであろう。ところで今の小学校の教育は、全体として、こういうことを考えて教育をやってはいない。つくることと見ることを、区分して考えるところのような考え方がないのである。ただどっちつかずで見せている。いわばその点で思想が未分化なのである。

勿論小学校ではつくることをやらせないわけではない。図画でも工作でも、また社会科や理科でも、場合によっては「つくる」活動をやらせる。そういうときは、つくるということについての考え方の如何

にかかわらず、実際に計算してものをみなくてはならぬ。だからそういう場合には、計算して具体的にものをみてやっているといるのである。けれども意識してはやっていない。またそういう風な人間を育てようと考えているわけではないから、そういう点について、特に指導が行われているわけではない。否、むしろそういう具体的な計算してみるということは、ないがしろにされている。そして、現代の小学校において、重点がおかれていることは、例えば、図画ならば、美的観念の養成といったような、一世紀前のモットーなのである。併しそれが悪いというのではない。それだけしか重点でないと考えられまたそこに中心があると考えられる所に、前世紀的な教育観があるとということである。つくると世界にすむ人間にとっても、美的観念は大切である。ただその位置づけが異なってくる。もつと具体的な所で、計算をした上で美ということも考えられるようになって来るということになる。このように見ると、やはりつくると人間を育てるということは、今の教育の伝統的な形態を根本からゆりうごかすものなのである。

つくると世界というのは、見る世界を、自分の中に含んで、それを構造づけた所のより高次の世界なのである。つくるということと、見るということとが同時にならんでいるわけではないのである。ところが今の教育では、それがならんで羅列されている程度である。否、ならんでいれば、立派な生産教育の学校であって、大抵はより低いものとして扱われている。特別教育活動で、畠をつくらせたり、山羊やにわとりや金魚をかつたりしているとすると、立派な生産学校である。そういう学校でも、決して、それがより高次の世界に属することなどは考えられていない。その程度である。図画や工作が、教科の中で、他の教科と同じようにならべられている学校はすくない。恰好はそう

であるが、本心は決してそうでなく、階級制になっていくのである。それが民主的に考えられていけば、これはもう、特筆大書すべきものである。ところが見る世界をのりこえて、つくる世界に住む人をつくとすると、それが実は最も高次なものとなって来るのである。これが本当の生産教育であるが、残念ながら、附属小学校にもそんなのは見当らない。

尤もそうだった時は、図画や工作の内容は全く異なったものとなるであろう。今の内容は見る世界の人間のアクセサリーとしての図画工作である。だからやはりアクセサリー的な取扱いを受けることになる。それをどうして切りかえて行くかということが、最も重大な問題であるが、アクセサリーという立場で考えるというその根本的な見方が改められなければならない。図画、工作の先生にそういう人が出て来る必要がある。ところが一般には、そういう生産とか産業とかいうことを強調すると、図画工作の本質から外れるなどという先生が多いのである。これは自らアクセサリーとなることを承認したようなものである。そこに根本的な運命的なものを感じられるのである。

社会科や理科で、つくる世界に生活する人間の教育が考えられているが、国語や数学でどうかということも、また考えてみる必要があることである。生産教育とか、産業教育とかは、そういうものと関係がないようにいわれているのである。せいぜい関係があっても、理科でその色彩を出すとか、社会科で産業のことを考えるとか、算数で、数学をやる場面を産業のことにするといった程度である。これは生産教育が、アクセサリーと考えられているということである。これは見る世界に住んでつくる、ということを考えているからである。つくるといっても、産業社会の中でつくるのである。だから見ることは極めて巾の広いもので、自然も、社会もその立場で、計算して見られる必

要があるのである。社会や自然を見る場合も、現代の小学校では、なるだけ、無責任に見ようとしている。言葉だけで見ようとしている。いわば適当な見方なのである。そうして、いわゆる知識という、見ないで知っていることに重点をおいている。それがそもそも、見ることが目標になっている世界のセンスなのである。

視覚教材を使用することもやかましくいわれているが、一向成りたないのは、そもそも根本的なセンスがちがっているからである。つくることが中心になって来ると、これでは到底ものの役に立たないのである。とくに産業の世界において働いている、自然の原理、社会的な原理を、具体的にみて、そこでとらえることが出来るというセンスがなければ、産業の世界で働くことが出来ないのである。そういうものがなくても今の人間は、産業人になっているということを人々はいうのである。その通りであるが、それだから、日本の産業社会が、多くの問題をもっているということに気がつかない。否、産業社会に入ると、圧倒されてしまう教育者が多くて、今の教育でこれだけの産業世界が成立しているから、今の教育は立派に効果をあげていると感ずるのである。それは要するに、教育者が田舎っぺだということである。生産教育とか、産業教育とかいうのなら、今の産業社会について、教師がよく見て、それに通曉していなくてはならない筈である。そうでなくては生産教育などということは考えられない筈であるのに、そういうものがない所で、生産教育とか、産業教育とかをいうから、おかしなものが飛び出すのである。併しこれは、今後永い期間に亘って、除々に養われるべきことであろう。まず教師が産業人としてのセンスを肉体的に持つこと事にならなくてはならない。

数学も、世界を具体的に計算してみることに欠くべからざるものであるが、今の数学はそろばんの程度であって、対象世界を数学的に見

るようには出来ていない。単元学習などというのは、具体的に計算しものを見る力になっていない。国語も同様であって、ただ見られたものを読んでいただけであって、つくるという立場で、計算して読まれている。だから本当に言語教育にならない。情緒的な文芸教育でもいふべきであろう。文芸でも、つくる立場で読まれるようにならなくては、本物のよみではないのである。綴るとか、話すとかは、カリキュラムも何もない所で、ただ原始的な教育が行われている。

このように考えると、つくる世界に住む人間の教育は、現代の小学校の形態を根本的に改めることを要請するのである。現代までにつくられた過去の社会の教育を改める要請である、といった方がよいかも知れない。

こういう根本的な要請であるから、もとより一朝にしてならないことである。将来数十年に亘る改造というように考えるべきである。

現代生産教育といわれて行われている諸々のものは、そういう永い改造のどこかの一コマになるのである。そのどれが生産教育だ、などというものではないのである。むしろ大切なことは、一つ一つの教育を、具体的に つくる立場から反省して行くことではないだろうか。何か一つのことをとりあげて、これが生産教育だというやり方は、真実の改造をもたらさないのである。例えば、特別活動の中に生産活動をいれたといつても、それが生産教育なのではない。それに固定してしまうことは却って危険である。何故なら、その他のすべての教科においても、つくる立場からの検討を必要とするものが極めて多いのである。それが企画的に構造的に変貌したとき、真の生産教育が成り立つのであることを忘れてはならないのである。

生産教育を考えるのではなく、教育を産業社会の基底の上で全面的に

改造するのである。そういうことが成り立つためには、まず第一に教育者が全面的に、そういうセンスになることである。そのことはどうして成り立つかという点、現代の教育の具体的な場面を、一つ一つ生産という考え方で検討して行くことしかない。そういうことをつみあげることによって、骨の髄までつくる世界にすむセンスをもつこと以外にない。生産活動をやってみるのもよい。けれども大切なことは、そういう現場で、一つ一つつくる人間の学習になっているか、具体的に計算してものを見ているか、ということを考えてみることである。そういうようにして改造されることが、現代小学校教育を、全面的に生産教育学校とすることなのである。

以上ここでは、つくる人の一つの要素であり、而も重大な要素である、具体的に計算してみようということだけを述べたが、まだ「つくる」ということ自体の教育が、その上に積みあげられなければならないのである。それは紙数がつきたので今回はここで筆をおく。

(国立教育研究所員)